

三河地域の中世集落

～室遺跡再考～

川井啓介

三河地域南部、矢作古川の下流域に位置し、中世集落が確認されている室遺跡、牛ノ松遺跡、八ツ面北部遺跡を比較検討することにより、遺跡の“地域的理解”のための分析を行った。分析手段は遺物の時期別カウントから導き出される遺物組成の読み取りと、歴史的環境からの関連性の解明である。その結果、室遺跡では従来不明であった12世紀の集落の範囲を特定し、14世紀以降集落が均質的屋敷地の集合体へ変質することが明らかとなった。同様に、牛ノ松遺跡は廃絶へ、八ツ面北部遺跡では区画溝の成立へ、という変革期が14世紀に認められた。そして、室遺跡は蘇美御厨を背景として成立した交通の要所に位置する都市的性格を持つ遺跡、牛ノ松遺跡は御厨の中心的集落（屋敷地）であり、八ツ面北部遺跡は一般的農村風景の中に展開する屋敷地であることを指摘した。

1. はじめに

室遺跡は愛知県西尾市室町・駒場町地内に所在し、額田郡幸田町の丘陵から流れ出る広田川と須美川に挟まれた自然堤防上に立地する。遺跡の南側には中世城館の室城が位置し、東側には吉良街道、北側には平坂街道が通る交通の要所である。平成3年度発掘調査が行われた室遺跡の成果についてはすでに報告書として刊行されているため、各時期の詳細はそれに譲るが、中世の遺構については、①地籍図および西尾市教育委員会の発掘調査（松井1993）の成果を用い、未発掘部分を含めた室遺跡に展開する屋敷地範囲の推定復元、②遺物カウントによる組成比較から各屋敷地の特徴や性格付け、を行った。そこで、本稿では遺物の時期別カウントを行うことにより、各屋敷地の遺構の変遷・盛衰を再検討し、さらに、同時期の周辺遺跡との遺物組成の比較検討を行うことにより、矢作川下流域における室遺跡の位置付けを考えてみたい。

2. 室遺跡の分析

（1）分析方法

まず、カウントの対象となる遺物の器種分類

について、これは報告書掲載のカウントデータとの対比を可能とするため報告書の分類に準ずる。但し、「土師器」鍋・釜については、後述の編年基準となる研究に準じ、通有の名称である“伊勢型鍋・内耳鍋・羽付鍋・羽釜”に変更した。次に遺物の編年については、「山茶碗」「古瀬戸」は藤沢良祐^{*1}、「常滑」は中野晴久^{*2}、土師器鍋・釜は『鍋と甕 そのデザイン』の北村和宏^{*3}・鈴木正貴^{*4}、の研究に拠った。但し、「古瀬戸」「青・白磁」については、まとまった出土量に至っておらず、カウントデータとしての不安定さを減少させるため、報告書同様一器種とした。遺構変遷上の時代区分については、本来であれば、遺物の編年と合致させることが望ましいが、分析目的が遺構を中心とした遺跡の分析である点から、遺物の編年時期とは多少齟齬をきたすが、大枠として12世紀、13世紀、14世紀、15世紀の100年単位を基本とした。具体的にいえば、山茶碗の4・5型式を12世紀、6・7型式を13世紀、8・9型式を14世紀とし、「古瀬戸」は15世紀に、「青・白磁」は13世紀で一括カウントした。

今回実施した時期別カウント法による比較は、総破片数を用いた。具体的な方法は、①各屋敷地出土の器種別総破片数は報告書掲載のものを使用する、②今回カウントする遺物は、「山茶碗」碗（以後山茶碗と表記）の底部、「土師器」鍋・釜（以

*1 藤沢良祐 1990.3『尾呂』瀬戸市教育委員会など

*2 中野晴久 1995.12『常滑焼と中世社会』永原慶二編 小学館など

*3 北村和宏 1996.9『尾張の羽釜』『鍋と甕そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム

*4 鈴木正貴 1996.9『東海地方の内耳鍋・羽付鍋・釜』『鍋と甕そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム

後鍋釜と表記)の口縁部、「常滑」壺・甕の口縁部とする、③②のカウント対象遺物を時期別にカウントし、山茶碗・「山茶碗」皿(以後小皿と表記)は山茶碗の時期別出土数比率を用い、「土師器」皿(以後土師皿と表記)・鍋釜・「山茶碗」鉢・「常滑」鉢は鍋釜の時期別出土数比率をそれぞれ各屋敷地出土総破片数に案分し、器種ごとの破片数を算定する、というものである。

本来であればすべての破片について時期判断をするべきであるが、破片数カウントの場合、小片をいかに分類するかが問題となり、型式変化があまり顕著でない遺物について、選別することはかえってミスを犯す確立が高くなると思われる。筆者の能力的問題も含め、今回は比較的時期分類が容易と思われる器種に限定した。また、土師皿は、同じ供膳形態の山茶碗で案分をかけるべきであるが、三河地域の特徴として、15世紀代の山茶碗が遺跡から出土する例は極端に少なく、この案分を使用すると、15世紀代土師皿は「0」という結果が生じてしまうため、あえて調理形態をとる鍋釜の案分を使用することとした。最後に、今回のカウントデータには一括性が高く、遺構・遺物ともに時期が特定できるⅡ-1期(対象遺構はSD61、SD46、SE10)の遺物は含まれていない。

(2) カウントによる分析

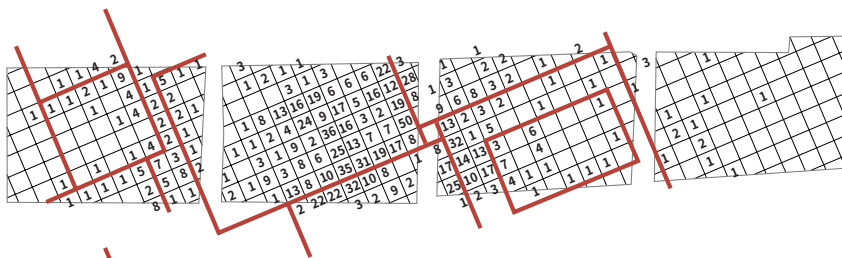
ここでは室遺跡で検出された遺構の変遷を考える。報告書に掲載した遺構図は、中世を12世紀後半、13世紀前半～15世紀、16世紀以降^{※5}の3時期に区分した。しかし、12世紀代では居住域の存在が推定されたものの、明確な範囲を示しえなかった。また、室遺跡の最盛期である屋敷地が7軒成立していた景観も最終的な姿を示したに過ぎず、必ずしも遺構の変遷をあらわしてはいない(図4)。そこで、時期別遺物の分布により、各屋敷地の盛衰についてみてみたい。それを示したものが図1であり、山茶碗の底部と鍋釜の口縁部の破片数を発掘調査時に設定した5mグリッドごとに示したものである。あわせて、区画溝の位置を示すことにより、屋敷地の範囲も表現してある。

まず山茶碗の分布について、12世紀は調査区A区東半部からC区西半部にその広がりが見られる。なかでも屋敷地Bに相当するエリアでの出土数は分布範囲の中でも抜きん出ており、ここが当時の居住域の中心であった可能性が窺われる。もう1ヶ所C区西端部に見られる出土遺物の多さは、この位置にSD61が掘削されており、そこには該当期の遺物が一括投棄されていたため、その影響で数値が上昇していると考えられる。13世紀にはいると山茶碗の分布は全調査区へ拡散する。12世紀の中心であった屋敷地Bエリアでは、この段階で屋敷地として区画されることにより、12世紀を上回る集中的出土をみせる。この状況は14世紀へも継続し、このエリアが室遺跡に展開する集落の中心であった可能性が高い。また、その他の調査区でも山茶碗に関しては一定量の出土がみられるようになることから、遅くともこの時代のいずれかの段階で居住域として成立していたと思われる。この傾向は14世紀においても読み取ることができる。しかし、屋敷地Bへの遺物の集中度は明らかに低下しており、山茶碗の生産量との関係も考慮に入れる必要があると思われるが、屋敷地B中心の集落から、均質化した屋敷地からなる集落へ変化してゆくと考えられる。但し、屋敷地の成立順はこの分布からは読み取りがたい。

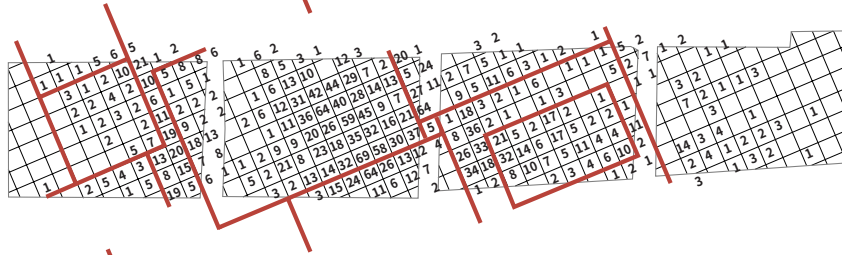
この変化を追認するには15世紀の山茶碗の分布を検証すればよいのだが、当該期の山茶碗については室遺跡ではほとんど出土を見ないため不可能である。そこで、15世紀の供膳形態の遺物を含む古瀬戸の分布からこの点を類推してみたい。

室遺跡の古瀬戸の分布は図1に示したとおりである。一見すると屋敷地Bに集中しているようであるが、たとえば屋敷地D・Gでの出土数は屋敷地Bと遜色のない量が出土している。また、調査区全域で古瀬戸は出土しており、先に述べた均質化の動きがより一層進展していることが確認できる。これに加えて注目すべきは、調査区D区における遺物出土量の多さである。発掘調査時には明確な屋敷地を検出することはできな

※5 16世紀以降、屋敷地は廃絶し、火葬施設が展開する。



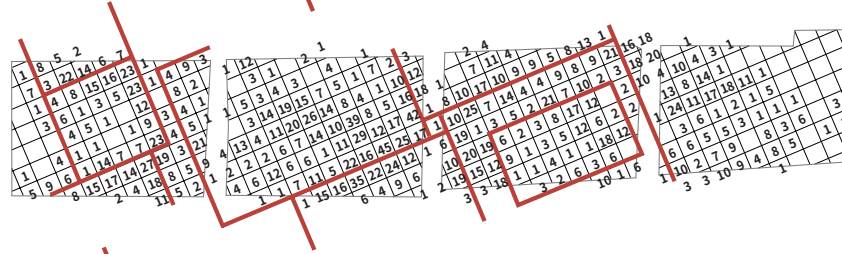
山茶碗 (12世紀)



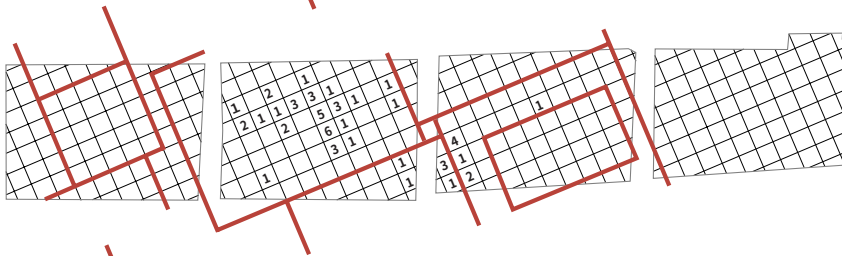
山茶碗 (13世紀)



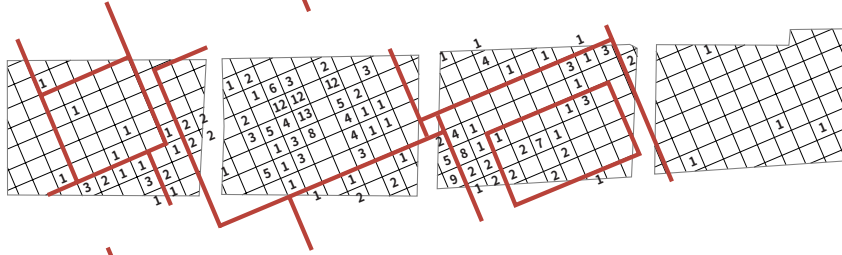
山茶碗 (14世紀)



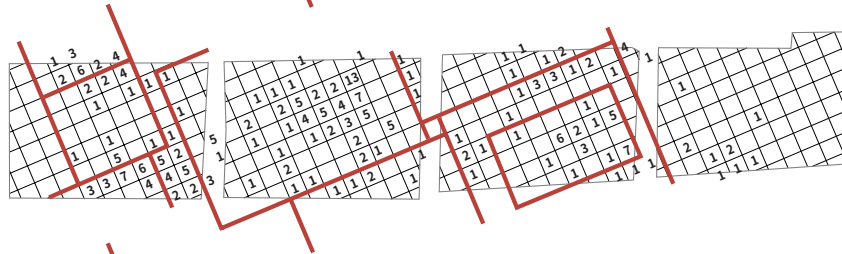
古瀬戸 (15世紀)



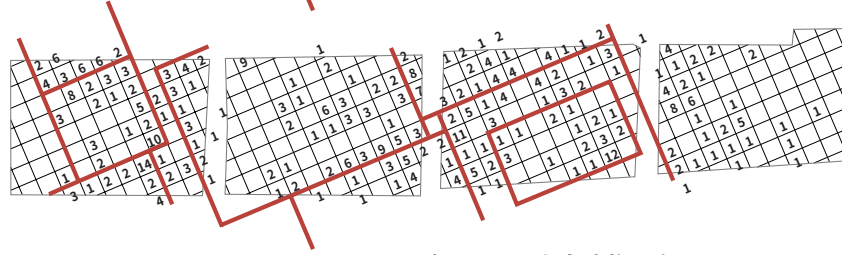
鍋・釜 (12世紀)



鍋・釜 (13世紀)



鍋・釜 (14世紀)



鍋・釜 (15世紀代)

図1 グリッド別出土遺物分布図

かったが、このエリアにも居住域が存在した可能性が高いと思われる。

では、以上の観点を鍋釜の出土状況から検証するとどうであろうか。12世紀の遺物の分布は、調査区B区を中心およびS D 61の位置するエリアに集中しており、その他からは出土をみない。これは山茶碗よりも出土範囲が限定されており、調査区B区で検出されたS E 10の存在からも、やはり当時の居住域は屋敷地B周辺であることが追認される。そう考えた場合、居住域の範囲は東西約100m、南北50m以上となる。13世紀では、12世紀に比して遺物の出土は調査区全域へと広がる傾向が見られる。そして、山茶碗同様、この段階で成立した屋敷地Bにその出土が集中している。この外の屋敷地については、屋敷地A以外である程度の出土を見ており、この段階での屋敷地の成立を想定しうる。但し、報告書の所見に基づき、区画溝を伴う屋敷地は屋敷地B・Cであり、その他の屋敷地については、区画溝は掘削されていないがある程度のまとまりを持った居住域という景観を呈していたと考えたい。

この屋敷地Bを中心とする集落のあり方は、14世紀に入ると変化していることが読み取れる。14世紀に入っても、遺物の出土が集中するエリアは屋敷地Bの中心部分である。しかし、その集中の程度は前代と比較すると極端に低下しており、やはり分散化へ向かっての動きが認められる。さらにこの段階では、屋敷地Aの北側に同様の小区画が成立している可能性を読み取ることができる^{※6}。

15世紀では14世紀から始まった遺物の分散化、すなわち屋敷地の均質化の動きがさらに顕著になっている。特に注目されるのは、それまで連綿と集落の中心を成してきた屋敷地Bに遺物の集中が見られなくなる点である。この段階で遺物が集中するエリアは区画溝が位置するところであり、遺構の最終段階を表していると思われる。これに対し、先に見た古瀬戸の分布はこの段階も屋敷地Bに遺物の集中ポイントが残っている。この相違は今回の時代区分の問題と思われる、当然室遺跡出土の古瀬戸には14世紀に属す

る遺物も含まれており、屋敷地Bに見られる集中ポイントはこの遺物が出土しているエリアであると思われる。最後に調査区D区に想定した居住域についてであるが、鍋釜の分布からもその可能性が高いことが推察される。この調査区では、12世紀の溝(S D 46)埋没後、井戸が1基構築されており、居住域であるとすればその存在も理解できる。但し、この居住域に区画溝は伴わず、他の屋敷地とは性格を異にする空間であると思われる。

以上、時期別遺物の分布から分析した遺構変遷における新知見をまとめておくと、①12世紀の居住域は調査区B区を中心としたエリアであること、②室遺跡の集落は、12世紀の成立期、13世紀の屋敷地Bを中心とする集落の誕生、そして14世紀均質化への動きが始まり、15世紀は均質な屋敷地の集合体へと変化すること、③従来想定していなかった調査区D区にも居住域が存在し、この居住域は区画溝を持つ他の屋敷地と異なる性格のエリアであること、をあげることができる。

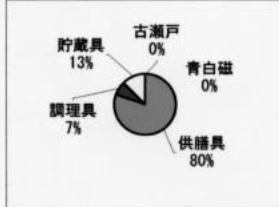
(3) 遺物組成による分析

ここでは遺物組成の側面から、遺構の変遷について考察を加える。分析方法は、器種別にカウントしたデータを用途によりグループ化し、比較検討を行う。今回用いた分類は、供膳形態をとる山茶碗・小皿・土師皿を供膳具、調理形態と考えられる鍋釜および「山茶碗」鉢、「常滑」鉢を調理具、貯蔵形態である「常滑」壺・甕を貯蔵具とした。また、古瀬戸、青・白磁については時期別カウント同様独立したグループという扱いをしている。この方法で分類した出土数を示したものが図3、比率を表示したものが図2である。分析にあたり、前述の遺物分布による分析及び報告書の遺構変遷から次のように仮定した。まず、室遺跡に中世の居住域が成立するのは12世紀後半であり、この頃遺跡が立地する微高地の中世における開発が開始される。そこで、図2の《12世紀》室遺跡全体を開発期における遺物組成パターンとする。すなわち、供膳具80%、調理具7%、貯蔵具13%という割合が、開発が行わ

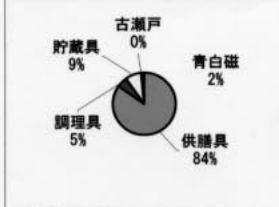
※6 従来の屋敷地Aの内部を分割して形成された可能性が高い。ただし、溝で区画はされているが、居住域との確定はさけたい。

※7 このエリアには鉄滓の充填された土坑が検出されており、鍛冶関連の空間も想定し得る。

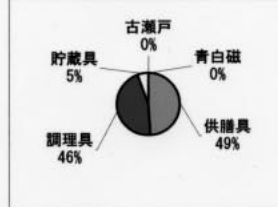
《12世紀》
室遺跡全体



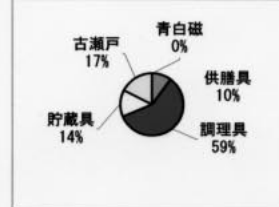
《13世紀》
屋敷地A



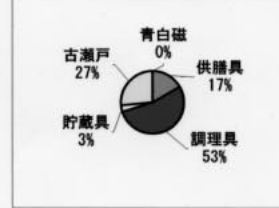
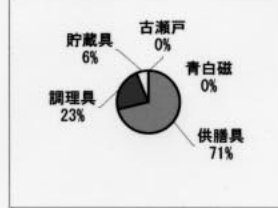
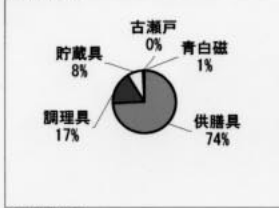
《14世紀》



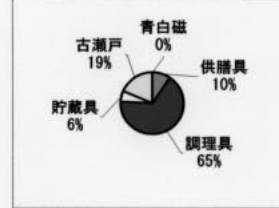
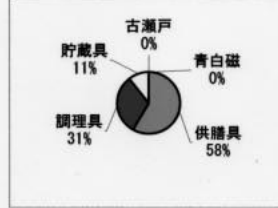
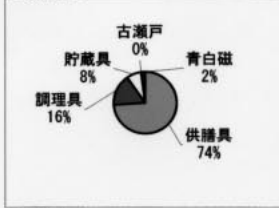
《15世紀》



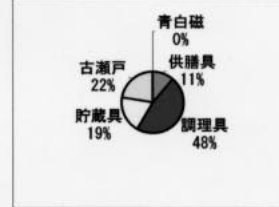
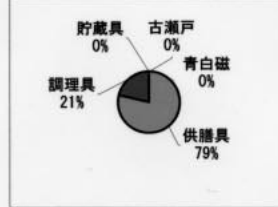
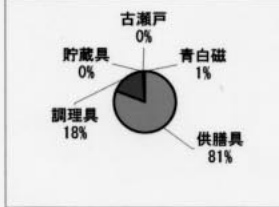
屋敷地B



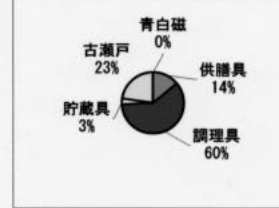
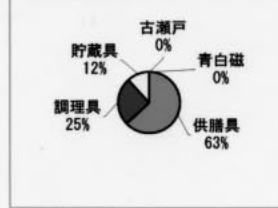
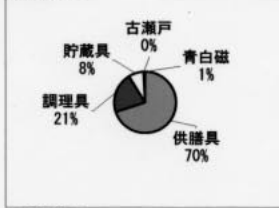
屋敷地C



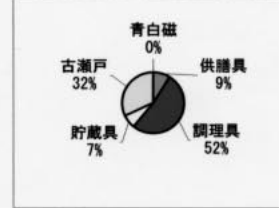
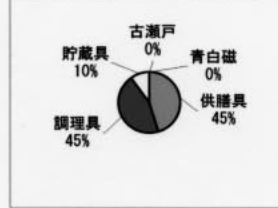
屋敷地D



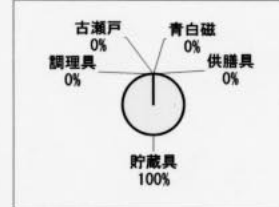
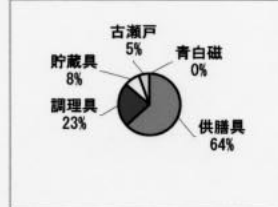
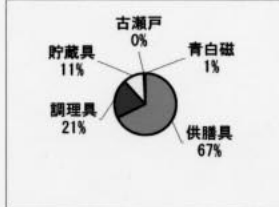
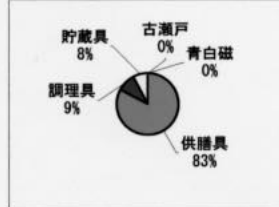
屋敷地E



屋敷地G



牛ノ松屋敷地



八ツ面屋敷地合計

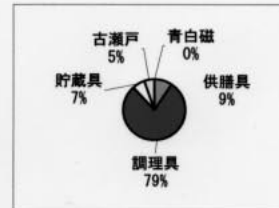
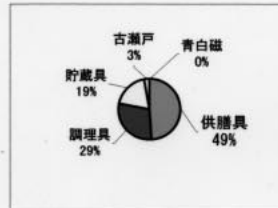
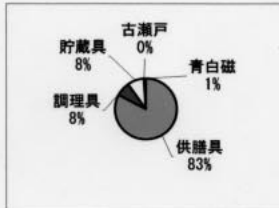
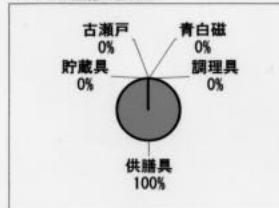


図2 遺跡・屋敷地別組成図

れ、集落もしくは屋敷地が成立する段階での遺物の使用量と考えてみる。同様に、13世紀では屋敷地Bが確実に成立しており、この屋敷地Bの遺物組成を屋敷地成立後安定期に入った遺物組成パターンと考えてみる。この2つの比率と各屋敷地の比率を比較した場合にどのようなことが読み取れるかを問題とする。尚、発掘調査で全域を検出できた屋敷地はなく、検出面積でのカウントデータの修正を行う必要が考えられるが、今回はあえて修正を加えずに検討している。

12世紀は室遺跡における開発の時代である。SD61と広田川の氾濫原までの間を居住域とし集落が形成され始め、13世紀にはいと屋敷地B中心の集落となる。他の屋敷地では、まず屋敷地Cが調理具の割合がわずかに1%異なる点を除けば、安定期パターンと同じである。これは屋敷地Cがこの段階で成立していた可能性が高いことを示唆している。同様に、屋敷地Eも若干調理具が多く、その分供膳具が減少してはいるが、そのエリアが居住域であったと推定される。これ以外の3屋敷地は、屋敷地Dは貯蔵具の出土をみないため詳細は明らかにしえない。屋敷地Gも3用途ともモデルパターンと大きく割合を異にしており、開発期、安定期どちらとも判断しかねる。あえて類推するならば、貯蔵具が約2割を占める点において、当時は開発期に近い様相を呈していたのではないかと考えたい。屋敷地Aについては、小区画であること、区画内部の遺構が希薄である点などその性格の判断に窮するが、組成の面からもこの屋敷地は他の屋敷地とは異なる空間であり、居住域であるか否かという点からの検討が必要とされる。

14世紀の特徴は、供膳具の減少、調理具の増加であり、6屋敷地すべて供膳具の減少分が調理具の割合を増加させていると言っても過言ではないであろう。この点に対する明確な答えは持ち合わせていないが、ひとつには山茶碗の生産量が前代をピークに減少することが影響しているとおもわれる。このように考えた場合、屋敷地Bはこの時代も前代同様の姿を保っていたと思われる。これに対し、屋敷地C・Eではやや変

化がみられ、貯蔵具の比率増加は開発期パターンへの回帰と考えられ、これは次代への再開発の萌芽と思われる。同様に屋敷地Gも開発・変化は低調になりつつあるが、まだ安定期には入りきっていない様相と考えたい。屋敷地Aの比率は他に類例を見ず、今後の検討課題である。屋敷地Dは前代同様、検出面積の狭小さの影響を受けている可能性が高く、比率がほとんど変化していない点を重視すれば、発掘調査において偶然貯蔵具が出土せず、供膳具の一部が仮に貯蔵具へ移行したとすれば安定期のモデルパターンに一致する。このように考えると、屋敷地Dは13・14世紀ともに安定期であり、屋敷地B同様12世紀の開発期に屋敷地の萌芽が見られ、13世紀には単独の屋敷地として成立していた可能性も考えられるようになる。

15世紀にはいと、遺物組成の様相は大きく異なってくる。その第一が古瀬戸の登場である。古瀬戸が後期段階に入りその生産量が増大するとともに、各遺跡である程度出土するようになる。その用途は豊富な器種により多岐にわたるが、室遺跡においては深皿を中心とした供膳形態をとるものが多い。第二に組成変化最大の原因である山茶碗・小皿の消滅である。この段階に入ると三河地域においては山茶碗の出土がほとんど見られなくなり、遺物の器種構成も大きく変化する。この影響は室遺跡における遺物組成でも確認され、従来7割前後を占めていた供膳具の割合が大きく減少するのはそのためである。それにかわり調理具の比率が上昇する。本来調理具とした器種のうち大半を占めるのは鍋釜であるのだが、この遺物は器壁が薄く壊れやすいため、破片数に換算すると必然的に多くを占めることになる。14世紀まで比率が抑えられていたのは、それを上回る山茶碗の出土をみていたためである。その上でこの時代の組成を考えた場合、2つにグループ化することができる。まず、屋敷地B・C・E・Gは調理具が5～6割を占め、貯蔵具は1割に満たない。そして、供膳具と古瀬戸をあわせると約4割という比率を示す。これは貯蔵具の比率の低さから、安定期に近い

と思われ、14世紀に屋敷地C・E・Gが開発（変革）期とした点と一致する。これは、屋敷地Bの優位性が薄れ、均質化に向かっていった結果であると思われる。これに対し屋敷地A・Dは貯蔵具の占める比率が高く、あえて言及すれば開発期パターンに類似していると思われる。

以上、遺物の分布および組成の両側面からの分析の結果、室遺跡を考える場合屋敷地Bを中心とする集落が成立する12世紀、均質化に向けて集落が変革を始める14世紀に画期を設定することができることが明らかとなった。今後この画期の成因と中世集落での普遍的なありかたであるか等の検討が必要とされる。そのためには、より多くの集落のデータを集積し比較検討しながら各種のモデルパターンの確立が求められる。

3. 室遺跡の位置付け

～地域における遺跡の理解～

（1）対象遺跡の概要

前項までの遺物カウントを中心とした室遺跡内部の分析に次いで、本稿は周辺遺跡との比較検討を行い、各遺跡の特徴を明らかにすることにより、矢作川下流域における室遺跡の位置付けを考える。比較方法は出土遺物のカウントに基づく組成比率を基本とし、補足で室遺跡を取り巻く歴史的環境を踏まえて考察を加える。この分析の比較対象とする遺跡は以下の2遺跡である。（第5・6図参照）

牛ノ松遺跡：室遺跡から東へ約3km、額田郡幸田町大字須美字牛ノ松に所在し、室遺跡の南東を流れる須美川上流左岸の中位段丘上に立地する旧石器から近世までの遺跡である。今回遺物カウントを行った遺構は、区画溝から県下4例目となる宋三彩洗が出土した屋敷地である。

八ツ面山北部遺跡：室遺跡の北西約2.5km、西尾市北部の八ツ面町・中原町に所在し、矢作川と矢作古川の分岐点にあたる碧海台地の縁辺部に立地する。西尾市教育委員会により平成2～4年度に発掘調査が行われ、7世紀前葉から16世紀までの遺跡であることが判明している。今回遺物カウントを行った遺構は、平成3年度に行

われた発掘調査で確認された中世の屋敷地Ⅰ～Ⅲである。

（2）遺物組成による比較

まず牛ノ松遺跡の遺構変遷を概観すると、集落が形成されるのは12世紀前葉から中葉であり、この段階では区画溝は掘削されていない。その後12世紀後葉から13世紀前葉に区画溝が地形に沿って掘削され屋敷地が成立する。この区画溝は13世紀末頃から土器廃棄が行われ、埋没していく。これを前提に、室遺跡のモデルパターンと照らし合わせてみると、まず12世紀の組成は、牛ノ松遺跡における集落形成期の組成といえる。同じ開発期パターンを室遺跡のそれと比較した場合、2データの相違点は、貯蔵具の占める割合に現れている。この差を生じる原因は、開発規模の大小にあると思われる。すなわち、室遺跡の12世紀における開発は方一町を想定しうる大規模開発であるのに対し、牛ノ松遺跡の開発は遺跡の画期となる規模ではなかったと思われる。事実、牛ノ松遺跡で区画溝が掘削される13世紀は、貯蔵具の比率が増加し、その組成は区画溝が掘削されたと考えられる室遺跡屋敷地Eの14世紀のそれに類似している。さらに、牛ノ松遺跡14世紀の組成は古瀬戸を供膳具に加えた場合、室遺跡屋敷地B14世紀の組成とほぼ一致し、室遺跡は均質化への変革期であったが、牛ノ松遺跡の場合は廃絶という変革の様子を示していると思われる。そして、牛ノ松遺跡15世紀は貯蔵具のみであるが、これは集落が14世紀で廃絶され、耕地化してしまったことを如実にあらわしている。この考えに基づけば、13世紀の室遺跡屋敷地Aのエリアは未だ区画溝は掘削されず、屋敷地としては成立を見ないが、空閑地ではなく、居住域として設定されつつあったと考えることができる。但し、貯蔵具の比率については、一概に何%であるから開発期、安定期と判断できるものではなく、遺構の変遷等を考え合わせた上で、どの段階がその遺跡にとっての画期となっているかで数値は当然変化するものであり、遺跡内での推移を問題にするべきであって、一律で考えるべきではない。

次に八ツ面北部遺跡との比較であるが、この遺跡の各屋敷地はカウントデータ総数が少なく、単独で比較した場合誤差を生じる可能性が高いため今回は3屋敷地合計で組成を示すこととする。

報告書によれば、9世紀後半から12世紀にかけての集落の存在が推定されており、その後13世紀以降に今回分析を行った屋敷地等が成立するとされる。これを遺物組成からみると、12世紀は出土する遺物が供膳具に限定され、人々の活動は推定されるが居住域とは判断し難い。これが13世紀にはいると、遺物組成は牛ノ松遺跡の12世紀とほぼ同じ比率を示すようになる。このことは、八ツ面北部遺跡に牛ノ松遺跡同様の小規模開発が行われ、居住域としての明確な空間が設定されたことを示している。そして、遺物組成は14世紀で貯蔵具の比率が大幅に上昇する変化をみせ、この段階で区画溝が掘削され、個別の屋敷地が成立するという遺跡の画期に相当する変革が起こっていると推定される。

以上遺物組成という総体としての遺物のあり方から3遺跡の変遷を考えた場合、いずれの遺跡も14世紀を契機としてその姿を変容させることが明らかとなった。次に視点を変えて個々の遺物のあり方から遺跡の性格を検討してみたい^{※8}。

第一は出土(所有)が階層性を表現する遺物である。例えば牛ノ松遺跡の屋敷地から出土した宋三彩洗であり、室遺跡の屋敷地Bから出土した景德鎮窯の白磁花卉(かき)唐草文小盤、青磁大盤、白磁壺である。発掘調査において中世集落から数%の貿易陶磁が出土することは珍しくはない。しかし、それは青・白磁の碗や皿が中心であるため、前述のようないわゆる優品と呼ばれる遺物が地方で出土する場合、それは特定階層以上の所有者像を浮かび上がらせる事ができる。また室遺跡では、出土する青・白磁の大半が屋敷地Bから出土しているということも忘れてはならない点である。

第二に、用途の特殊性が指摘されている土師皿の出土状況である。土師皿は非日常的な饗宴・

儀礼に用いられる一過性の強い器種だとされる。そのため、遺跡内から多量の土師皿が出土することは、富裕な居住者が存在し、饗宴・儀礼が繰り返し行われたことを想像させる。この観点から3遺跡をみると、最も多くの土師皿が出土している遺跡は牛ノ松遺跡である。報告書の口縁部計測データによれば、分析対象とした屋敷地の区画溝のSD01では23%を占めるとされる。これを総破片に換算してみると27.5%となる。これに対し、室遺跡では全出土破片の6.1%、八ツ面北部遺跡では3屋敷地の合計で3.4%と圧倒的な差が生じている^{※9}。尾張地域ではあるが同時期の遺跡における土師皿の割合を比較してみると、朝日西遺跡では50%と高い比率を示すが、土田遺跡第2次調査、天白元屋敷遺跡第3次調査で5%以下、名古屋城三の丸遺跡第6・7次調査で20%であり、牛ノ松遺跡の出土割合ははかかなり高い。貿易陶磁のあり方では類似性をもつ室遺跡と牛ノ松遺跡は、この点では性格を異にする。八ツ面北部遺跡は、貿易陶磁・土師皿の出土ともに2遺跡とは様相を異にしており、土師皿の出土割合が数%であることが一般的であれば、貿易陶磁のあり方とあわせ、農村の様相を示す例と考えることができるのではなかろうか。(図3参照)

最後の要素として、遺跡からの遺物の出土量を比較してみる。この比較方法は、1㎡単位の遺物出土量を比較するものである。近年の研究では中世における都市からは1㎡あたり10点を超える遺物が出土するとされ、これに対し農村では一桁またはそれ以下の数字(1㎡調査して1破片出土するか、しないか)とされる。つまり、10点をこえれば“都市”とする。室遺跡の場合、6屋敷地の全出土破片数を全屋敷地面積で割ると、1㎡で9.7点となり、ほぼ10点に近くなる。これに対し牛ノ松遺跡は今回カウントした遺物数を屋敷地の検出された面積で割ると4.72、八ツ面北部遺跡は3屋敷地の合計破片数を3屋敷地の面積で割ると0.67という数値となる。先に述べた都市と農村の基準となる数値をそのまま当てはめるとすれば、室遺跡は鎌倉・京都並みの

※8 この点については、参考文献の遠藤論文(1999)、尾野論文(1996)に詳しい。

※9 八ツ面北部遺跡の屋敷地Ⅲ南東のSK12からは、完器70個体を含む401破片の土師皿が一括出土しており、空間の性格を含め、今後の検討を要する。

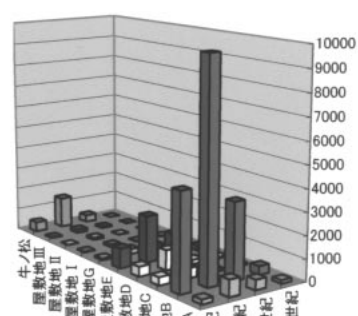
《12世紀》	供膳具				調理具					貯蔵具		古瀬戸	青・白磁
	合計	山茶碗	小皿	土師皿	合計	伊勢型鍋	羽釜	くの字・内耳鍋	山茶碗鉢	常滑鉢	常滑甕		
屋敷地A	209	192	17	0	0	0	0	0	0	0	25	0	0
屋敷地B	4342	3922	295	125	398	348	0	0	32	18	261	0	0
屋敷地C	361	343	18	0	0	0	0	0	0	0	112	0	0
屋敷地D	444	405	26	13	53	47	0	0	4	2	92	0	0
屋敷地E	869	800	44	25	108	94	0	0	7	7	474	0	0
屋敷地G	77	60	8	0	0	0	0	0	0	0	18	0	0
室全体	6302	5722	408	163	559	489	0	0	43	27	982	0	0
牛ノ松	436	352	37	47	50	39	0	0	11	0	41	0	0
八ツ面全体	77	65	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
屋敷地I	33	28	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
屋敷地II	11	9	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
屋敷地III	33	28	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

《13世紀》	供膳具				調理具					貯蔵具		古瀬戸	青・白磁
	合計	山茶鉢	小皿	土師皿	合計	伊勢型鍋	羽釜	くの字・内耳鍋	山茶碗鉢	常滑鉢	常滑空甕		
屋敷地A	754	686	60	8	45	39	0	0	3	3	76	0	14
屋敷地B	9738	8399	633	706	2259	1973	0	0	182	104	1045	0	112
屋敷地C	442	407	21	14	98	87	0	0	5	6	45	0	13
屋敷地D	899	799	52	48	203	180	0	0	14	9	0	0	11
屋敷地E	2092	1844	102	146	633	540	12	0	38	43	237	0	26
屋敷地G	224	190	25	9	51	47	0	0	2	2	72	0	0
室全体	14149	12325	893	931	3289	2866	12	0	244	167	1475	0	176
牛ノ松	1399	850	89	460	425	385	0	0	38	2	223	0	18
八ツ面全体	345	293	49	2	34	14	0	0	18	0	35	0	5
屋敷地I	98	83	14	1	5	5	0	0	0	0	0	0	0
屋敷地II	94	80	13	1	9	5	0	0	4	0	18	0	2
屋敷地III	153	130	22	1	20	5	0	0	15	0	18	0	3

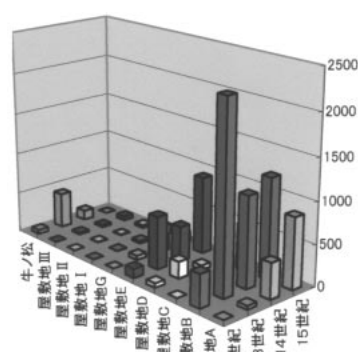
(14世紀)	供膳具				調理具						貯蔵具		古瀬戸	青・白磁
	合計	山茶碗	小皿	土師皿	合計	伊勢型鍋	羽釜	くの字・内耳鍋	山茶碗鉢	常滑鉢	常滑甕			
屋敷地A	457	353	31	73	427	273	98	0	30	26	51	0	0	0
屋敷地B	3435	2878	217	340	1088	834	116	0	88	50	299	0	0	0
屋敷地C	122	107	6	9	65	58	0	0	3	4	22	0	0	0
屋敷地D	195	171	11	13	53	47	0	0	4	2	0	0	0	0
屋敷地E	1041	896	49	96	417	317	47	0	25	28	190	0	0	0
屋敷地G	163	120	16	27	160	129	17	0	7	7	36	0	0	0
室全体	163	4525	330	558	2210	1658	278	0	157	117	598	0	0	0
牛ノ松	324	166	17	141	118	69	49	0	0	0	41	28	0	0
八ツ面全体	90	71	12	6	54	47	5	0	0	1	35	5	0	0
屋敷地I	14	9	2	3	25	19	5	0	0	1	18	0	0	0
屋敷地II	19	15	3	1	5	5	0	0	0	0	0	0	0	0
屋敷地III	57	46	8	3	24	24	0	0	0	0	18	5	0	0

《15世紀》	供膳具				調理具						貯蔵具		古瀬戸	青・白磁
	合計	山茶碗	小皿	土師皿	合計	伊勢型鍋	羽釜	くの字・内耳鍋	山茶碗鉢	常滑鉢	常滑甕			
屋敷地A	146	0	0	146	852	0	156	585	59	52	202	253	0	
屋敷地B	378	0	0	378	1209	0	190	865	98	56	73	602	0	
屋敷地C	78	0	0	78	541	0	39	444	26	32	43	152	0	
屋敷地D	53	0	0	53	225	0	9	190	16	10	92	107	0	
屋敷地E	215	0	0	215	928	0	129	680	56	63	47	352	0	
屋敷地G	22	0	0	22	130	0	26	94	5	5	18	80	0	
室全体	892	0	0	892	3885	0	549	2858	260	218	479	1546	0	
牛ノ松	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	81	0	0	
八ツ面全体	23	0	0	24	206	0	47	156	0	3	17	14	0	
屋敷地I	15	0	0	15	125	0	5	118	0	2	0	0	0	
屋敷地II	4	0	0	4	33	0	14	19	0	0	0	9	0	
屋敷地III	6	0	0	6	48	0	28	19	0	1	17	5	0	

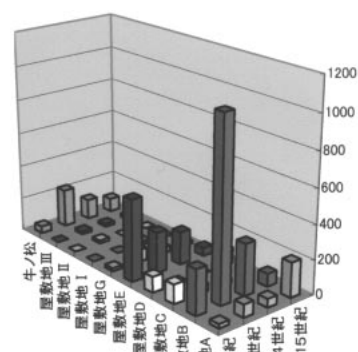
※ 室・八ツ面北部遺跡について、該当データを合計した数値と全体と表記したデータの相違は案分により生じるもので、間違いではない。



供膳具



調理具



貯蔵具

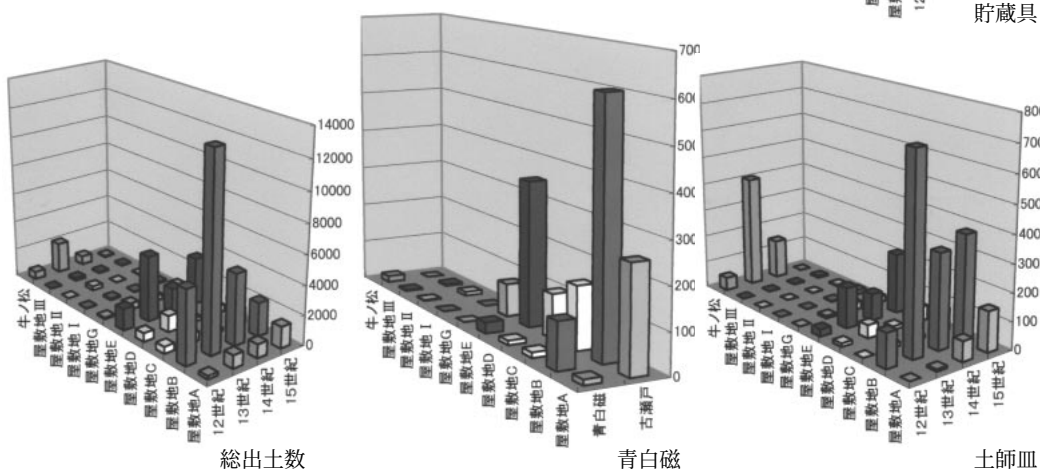


図3 器種別出土破片数一覧

遺物消費が行われる都市であり、他の2遺跡は農村風景が展開していたこととなる。但し、牛ノ松遺跡は八ッ面北部遺跡の7倍もの遺物消費が行われており、八ッ面北部遺跡と牛ノ松遺跡の屋敷地を同等に扱うことは難しく、牛ノ松遺跡は地域の中心程度の都市性を持ち合わせていたと考えたい。

以上、貿易陶磁で室遺跡と牛ノ松遺跡、土師皿で室遺跡と八ッ面北部遺跡、都市性では牛ノ松遺跡と八ッ面北部遺跡に類似性が認められ、その組合せから、室・牛ノ松遺跡の特殊性、八ッ面北部遺跡の一般性（農村的あり方）が明らかとなった。次に問題となるのは、異なった性格の遺跡を成立させる要因であり、それらが構成する景観である。

（3）歴史的背景からの分析

ここでは、前項までの分析で特殊性が明らかとなった室・牛ノ松両遺跡について、その性格形成過程を歴史的背景から考えてみたい。

室遺跡と牛ノ松遺跡は、現在は異なった行政区分に属しているが、当時は共に幡豆郡に属していた。このうち歴史的背景を文献史料から比較的明らかにしうるのは牛ノ松遺跡である。牛ノ松遺跡が所在する須美地域は、『伊勢大神宮神領注文』※10によれば、往古神領であり、保延元年(1140)に再度寄進され久安元年(1145)に宣旨をうけた蘇美御厨に比定されている。また、牛ノ松遺跡の東には『三河国内神明名帳』※11に記載される蘇美天神が鎮座しており、この一帯の開発は平安時代中期以降にはじまった可能性も考えられている。蘇美御厨以外で幡豆郡に存在し、現在比定が可能な御厨としては、饗庭御厨、角平御厨を挙げることができる（第7図参照）。この3御厨の範囲を推定させる史料はわずかだが残されており、饗庭・角平御厨では『中右記』長承元年11月4日条に「参河国饗庭御厨内、字角平寺島郷事、伴所代々国司奉免、永久三年被奉免宣旨了」とあり、矢崎川流域が御厨域に該当し、蘇美御厨に関してはやや時代は下がるが、元弘三年8月9日の木戸宝寿丸宛後醍醐天皇綸旨に「須美村内家武□□□□伝可令知行」※12とあり、須

美川流域が当時「須美」として捉えられていた範囲であったと考えられる。この御厨の立地を荘園研究における一般論にあてはめてみると（大山1996）、矢作川下流域に展開する荘園は平野部タイプと周縁山間部タイプの組み合わせで考えることができる。現在の西尾市・幡豆郡を荘域とした吉良荘は、郡の中心を南流する矢作古川により形成された沖積平野を支配対象としていたであろう。これに対し、蘇美御厨は郡レベルの河川に注ぐより小さな河川、荘郷レベルの河川に相当する須美川が形成する氾濫平野に形成された耕地を荘域とし、幡豆山塊の小谷に成立した御厨として独立した世界を形作っていたと考えられる。そしてこの小谷を支配管理する集落は、谷の開口部の微高地に形成される事が多く、自らの背後に展開する湿潤地を開発維持していたと思われる。したがって牛ノ松遺跡は、その小谷の最奥、もしくは眼前に広がる耕地を意識して成立した集落とすることができる。そして、蘇美御厨を考えた場合、この地は往古以来須美の中心地であり、おそらく最初に開発が行われた地であると想像され、このことが一般農村以上の遺物の出土量を見、宋三彩や土師皿の大量出土という条件を作り上げた要因と言えるのではなかろうか。また、14世紀に牛ノ松遺跡が廃絶する理由は、主要な谷部の開発が終了し、次なる開発地を求めた結果、須美川が合流する広田川、もしくは矢作古川流域の未開地へと移住したためであると考えられる。その移住先は現在の集落域であり、室遺跡周辺である可能性が高い。

その室遺跡は、蘇美御厨が形成された小谷の開口部にあたり、周囲には広田川の氾濫平野が広がっている。この地が御厨の範囲であるか否かは不明であるが、遺跡東の家武村（現家武町）が御厨であったことは先述のとおりであり、まったく無関係であったとは考えにくい。海上交通を利用して三河に展開したと考えられる神宮領の西三河地域で最も内陸に位置する蘇美御厨の開口部にあたり、広田川・矢作古川に隣接するという立地は、小谷の開口部に位置し、かつて津が存在したといわれる角平御厨のそれに類似

※10 『鎌倉遺文』第2巻第614号

※11 『続群書類従』第3輯上

※12 『鎌倉遺文』第41巻第3254号

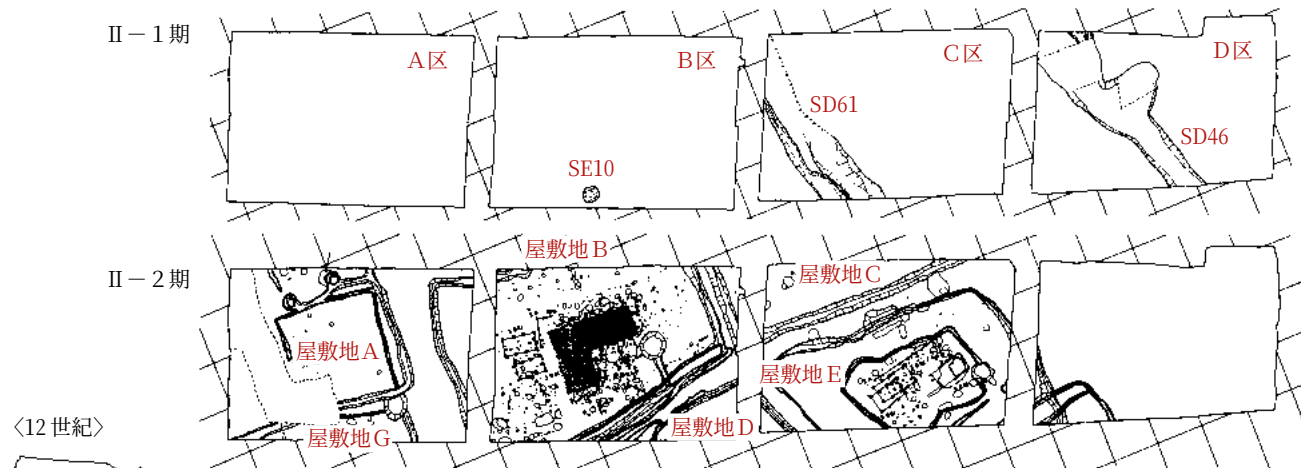


図4 室遺跡遺構変遷図 (1:1,500)

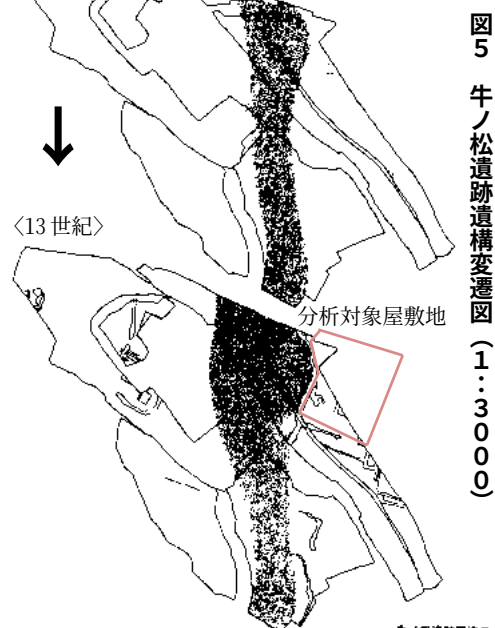


図5 牛ノ松遺跡遺構変遷図 (1:3,000)

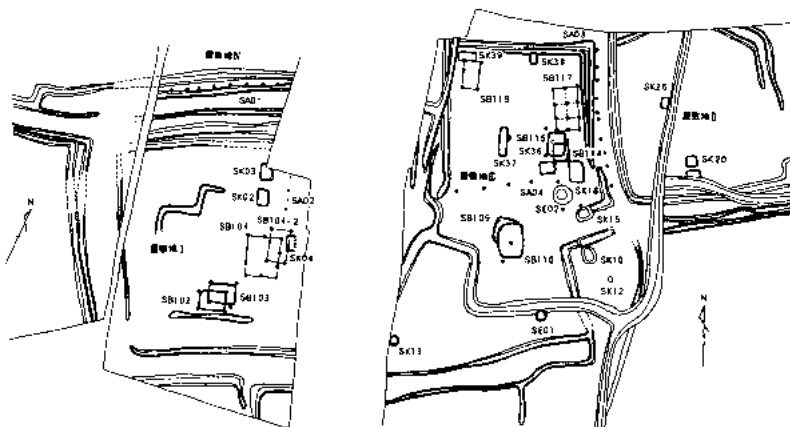


図6 八ツ面北部遺跡屋敷地 (1:1,000)

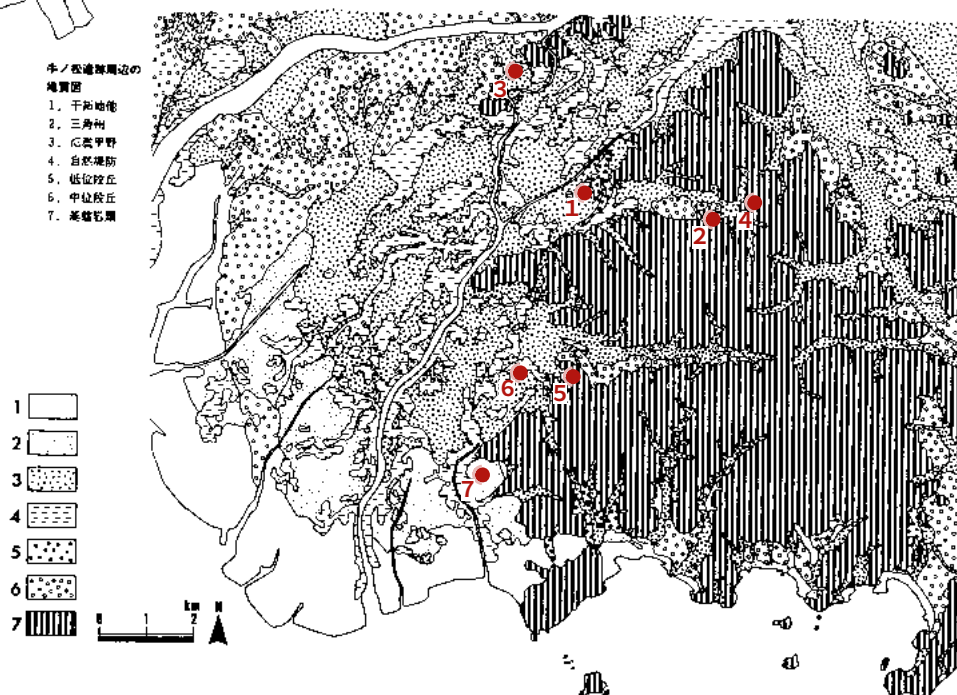


図7 関連遺跡等位置図

1. 室遺跡 2. 牛ノ松遺跡 3. 八ツ面北部遺跡 4. 蘇美天神
5. 角平御厨 6. 寺嶋 7. 饗庭御厨

する。矢作古川を利用した舟運に関しては文献・考古両側面から分析がおこなわれ、その利用頻度はわれわれの想像を越えるものがあると思われる。たとえば、『中右記』永久二年(1114)二月別記三日条^{※13}には「就中遠江尾張參河海賊強盜多以出来、奪取供祭物甚不便也」とあり、仮に蘇美御厨の供祭米が海路伊勢へ運ばれたとすれば、室遺跡周辺から広田川、矢作川、三河湾へというルートが想定できる。また、「室」という地名は“無漏(むろ)”から派生したもので、いわゆる「公界」の地であり、港であるとの指摘もある。室遺跡が港であったという点はさておき、交通の要所(港・泊・津・宿など)であったとすれば、鎌倉・京都に匹敵する量の遺物が出土することはたやすく理解できる。そして、その背景に蘇美御厨が存在していたとすれば、14世紀以降御厨の開発対象が移動し、御厨そのもののあり方が変化すると共に、吉良氏の勢力拡大に伴い、須美保政所職が吉良満義から今川氏兼に与えられるという支配の変化に呼応するように、室遺跡の遺構のあり方も14世紀を境として変化し、出土量も減少することと一致を見る。この2遺跡を取り巻いていたものが、八ツ面北部遺跡で示された農村的屋敷地であり、この3遺跡が有機的に関連しあいながら、中世矢作古川下流域の景観を作り出していたのである。

4. まとめにかえて

近年全国各地で行われる発掘調査により、中世集落のデータも数多く蓄積され、三河地域においても、多数遺跡が調査・報告されている。但

し、そのデータは、遺跡ごとの分析であり、地域的な観点からの分析はほとんど行われていない。今回室遺跡の再検討を行う上で中心としたのはその視点であった。室遺跡内部では、時期別遺物カウントを行うことで、12世紀の集落範囲を特定し、14世紀以降集落のあり方が、均質化に向けて変化してゆくことを明らかにした。また、八ツ面北部遺跡、牛ノ松遺跡との遺物カウントデータの比較により、それぞれの遺跡の特徴を抽出し、その上で、室遺跡の地域における性格分析を試み、室遺跡は蘇美御厨を背景として成立した都市的性格を持つ遺跡、牛ノ松遺跡は御厨の中心的集落(屋敷地)、八ツ面北部遺跡にはあまり言及はできなかったが、一般的農村風景の中に展開する屋敷地で、区画溝の掘削が14世紀である可能性を指摘した。カウントデータの読み取りは、報告書・発掘調査時の所見とのすりあわせになってしまったという反省があるものの、試案にはなりえたのではないかと考えている。但し、今回行った分析方法は、データの蓄積が必要であり、より多くの遺跡において実施し、比較検討することにより、より確かなものにすることができよう。そして、屋敷地A・Gにみられる不安定な組成を示す空間をどのように理解するかという点も解明可能となるであろう。また荘園の一部とされている知立市腰前・小針遺跡のデータと牛ノ松遺跡のデータを比較することによりその違いを明らかにしうるであろうし、類似点を指摘することが可能となる。いずれにせよ、今後より一層のデータ蓄積に伴い、「地域の中での遺跡」を考えてゆくことが、中世の景観復元を可能にすると考える。

参考文献

- | | |
|----------|---|
| 遠藤才文 | 1999.3「中世尾張の村と市町」『尾張平野を語る』一宮市博物館 |
| 鋤柄俊夫 | 1999.2『中世村落と地域性の考古学的研究』大巧社 |
| 大山喬平編 | 1996.9『中世荘園の世界 東寺領丹波国大山荘』思文閣出版 |
| 綿貫友子 | 1993「尾張・参河と中世海運」『知多半島の歴史と現在 NO5』日本福祉大学知多半島総合研究所 |
| 尾野善裕 | 1996.12「東海地方の尾張地域を中心とした中世の土器・陶磁器組成について」『中近世土器の基礎研究X I』日本中世土器研究会 |
| 網野善彦ほか | 1991.12『伊勢と熊野の海 海と列島文化8』小学館 |
| 網野善彦 | 1998.9『海民と日本社会』新人物往来社 |
| 仁木宏 | 1997.5『空間・公・共同体』青木書店 |
| 脇田晴子 | 1988.4「中世の分業と身分制」『日本中世史研究の軌跡』東大出版会 |
| 佐々木銀弥 | 1988.4「中世後期地域経済の形成と流通」『日本中世史研究の軌跡』東大出版会 |
| 井原今朝男 | 1993.4「幕府・鎌倉府の流通経済政策と年貢輸送」『中世の発見』吉川弘文館 |
| 中世都市研究会編 | 1996.9『津泊宿』新人物往来社 |
| 小野正敏 | 1997.7「戦国城下町の考古学」講談社選書メチエ |
| 鋤柄俊夫 | 1995.3「第5章Ⅱ調査区の景観復元」『日置荘遺跡』大阪府教育委員会、(財)大阪府文化財センター |
| 松井直樹編 | 1991～1993『八ツ面北部遺跡I～III』西尾市教育委員会 |
| 山本ひろみ編 | 1995『腰前遺跡』知立市教育委員会 |
| 大野真規編 | 1996～1998『小針遺跡』『小針遺跡II』『小針遺跡III』知立市教育委員会 |
| 宮腰健司編 | 1995.3『牛ノ松遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター |
| 川井啓介編 | 1994.3『室遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター |